

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	商学部
大項目	6 教育内容・方法・成果
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 商学演習(1年次必修科目)における共通講義内容(ベンチマーク)を作成し、教員に徹底する。	→商学演習の共通講義内容(ベンチマーク)の作成。毎年4月の教授会での配布と確認。	B	C	B	B	B
2. 各学年の履修申請単位数上限を2～4単位程度引き下げ、一方でGPA上位の学生には単位数制限を緩和する。	→履修申請単位数。内規の改正。	A	A	A	A	A
3. シラバス内容と整合する授業が実施されているかを確認する。	→シラバスの遵守について教授会での確認。	C	C	B	B	B
4. 全科目のシラバスにおいて評価方法を明示する。	→ネットシラバスへの評価方法の記載率。	B	B	B	B	A
5. 成績評価結果を教員へ公開する。	→事務室における成績評価結果の常時閲覧実施の有無。	A	A	A	A	A
6. 単位認定の適切性を定期的に確認する。	→単位認定数。定期的な単位認定の見直し内容。	A	B	A	B	A
7. FD委員会主催の授業改善のための研究会を継続し、FD委員会主催研究会への参加教員を増加させるとともに、教員からの提案・議論の活性化および授業改善取組事例の共有を進める。	→FD委員会主催の研究会の開催数。FD委員会主催の研究会への参加教員数。授業改善取組事例の報告数。	A	B	B	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 商学演習(4単位)をクラス担任制に位置づけ、共通で実施してほしい内容を周知し、さらに各種ガイダンス(例えば、情報ネットワークや図書資料)等の案内も新学期前に各教員に連絡し、有効活用を図っている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か クラス担任制の位置付けも定着し、例えば、大学生活になじめない、あるいは欠席の多い学生への対応や成績不振学生に対する対応窓口(担当者)としても機能している。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 共通すべき講義項目の共有化は図られたが、各教員の対応あるいはその内容は異なる。特に、学生の学習方法は年々情報ネットワークに依存する状況のため、最低限の共通項目に関する副読本が作成できれば、学生の復習・自習も含めて充実したものになる。	☆
		その他	☆
			☆
目標2	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度の新カリキュラムから実施済み。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 新カリキュラム導入後の学生は現在3年生のため、効果測定を行うには十分なサンプルを有しないが、学生自身の学びの中ではこうした制度の周知は十分に図れた。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 現行は履修科目数に対する制約条件(あるいは緩和)としているが、例えば、科目ナンバリングと併せて、履修科目レベルのGPA目標値を設定するなど、より積極的な活用方法の検討も必要である。	☆
		その他	☆
			☆
目標3	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか シラバス入力システムの変更(2014年度より)で、各教員は必ず毎回の授業内容を記載する形式となり、かつ履修学生への周知等を図るよう通知している。また、ファカルティ・ディベロップメント委員会による定期的な内容確認を行い、不十分な担当者への連絡も実施している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か シラバスの記載については改善されたが、学生の履修行動(履修の順番、関連性など)に十分反映されているとは言えない。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学部で作成しているカリキュラム・マップや科目ナンバリングとの関連性を持たせ、学生が有機的に履修計画ができるような仕組みを検討する。	☆
		その他	☆
			☆
目標4	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか シラバス入力システムの変更(2014年度より)により、担当教員は詳細な評価方法の入力が義務付けられた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 今年度からの新システム運用のため、その効果検証は不可能であるが、履修登録時点において学生は評価に関する十分な情報を入手可能となった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 評価方法の設定は十分に達成されたが、各担当者の評価結果の妥当性までは判断できない。試験等の内容や成績分布などから、公正な評価方法および学習水準であったか否かの検証は必要である。	☆
		その他	☆
			☆

目標5	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 成績評価結果については、事務室において成績評価結果を常時閲覧できる体制をすでに整えている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 成績評価結果の開示は十分に達成されたが、その有効活用法を検討する必要がある。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 成績評価結果を踏まえて、科目ごとの学習到達度の検証やカリキュラム・マップへの反映など活用法の検討も必要である。	☆
		その他	☆
			☆
目標6	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度より実施の新カリキュラムより、単位認定についてより厳しい基準を設け、すでに実施している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 実施後2年のため、効果検証は不可能であるが、一部の授業ではほぼ必須化されるなど、積極的な履修体制に向かっている。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 定期的な検証体制をファカルティ・ディベロップメント委員会で構築し、実施するよう検討している。	☆
		その他	☆
			☆
目標7	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 定期的なFD委員会主催の研究会(年2回)を実施し、他学部や学外の講師を招き、授業方法の改善を議論している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 授業運営に関する課題やアイデア、さらに教員それぞれの実施方法を学部内で共有することが可能となった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 授業調査などから授業運営に関する評価の経年変化を把握し、ファカルティ・ディベロップメント委員会への活動に反映させるなど、さらなる効果的な仕組みを検討する。	☆
		その他	☆
			☆
備考		☆	